

渡嘉敷ペークー話

沖縄・豊見城の笑話

中村史

豊見城市は、沖縄本島南部、那覇市のすぐ南、そして最南端の糸満市の北側に位置し、都市と農村の性格をあわせもつ町である。最近とみに大都市の様相を示してきた那覇市に隣あい、豊見城市も急速に変わりゆく観がある。長いあいだほとんど日本最大の村として存続していたが、二〇〇二年四月、ようやく市となったのである。歴史をふりかえれば、まず、群雄割拠の三山時代（十四世紀初〜）、この地は南山に属してその出城である豊見城を擁していた。三山統一（一四二九年）後、第一尚氏時代を通じ、また、つづく第二尚氏の王府時代には豊見城間切として、つねに那覇・首里の中央と南部をむすぶ重要な地でもあった。あの沖縄戦に際し、激戦地となつて多くの犠牲者を出したことも付けくわえておかないわけにはゆかない。いまをさかのぼる十数年の一九八九年（平成元）と一九九〇年（平成二）の夏、二度にわたる民間説話の集団調査が行われ、二十世紀も十年を残すのみのこの時期としてはまずまずの成果を挙げている。その後著者はこの仕事を受け継ぐこととなり、資料整理、追跡調査、またそれ以外の調査をも行って、いくつかの調査報告と論文を公刊している。

今回、いまだやり残している仕事の一部をまとめておくことにしたいが、本稿は、前述の集団調査によって得られた豊見城の民間説話資料のうち、「笑話」としての性格をもつ「渡嘉敷ペークー」についての考察である。

沖縄の「頓智話」「笑話」の世界で有名な三人の人物は、モーイ親方、勝連パーマ、そして、渡嘉敷ペークーである。このうちで、モーイ親方は琉球の国難を救う「薩摩の難題」の主人公である。「薩摩の難題」は柳田国男が「完形昔話」「知恵のはたらき」の部に入れた「姥捨山」（難題型）の話型に相当するものである。そして、この「薩摩の難題」をとりまいて、「煙草は一回」「下駄と草履」「嫁釣り」などと名づけられているモーイ親方の小話的話群が存在している。ちょうど英雄のエピソードといったかっこうである。そのような意味でも、モーイ親方は、古代の英雄神話の主人公の末裔であり、柳田国男の言うところの「知恵のはたらき」をつかさどる神童に最も近い。勝連パーマや渡嘉敷ペークーに比較して、その立場も「王子」「按司」につぐ土族の位、「親方」を得ているのだからきわだって高く、また、公的な世界の人物としての性格が強いのだ。本土の方に類似の例を求めらば、高僧の一休などがそれに当たるだろう。それに対して、勝連パーマは「狡猾者譚」の主人公のひとりと言つべきだが、ときとして悪知恵が過ぎ、そのために自らの失敗を招いたり、また他人に嫌われたりする。本土の狡猾者譚の主人公たち、熊本の彦一（彦市、彦八）、大分の吉右衛門（吉四六、吉吾）などの「狡猾者」たちと、同様の性格・傾向をもつ。これに対して、渡嘉敷

ペーケーはひろく言えば「狡猾者」の部類に入ろうが、勝連パーマのような毒気、悪どさはない。ある意味で「おどけ者」の名がよりいっそうふさわしい愛すべき頓智話の主人公である。また、彦一、吉右衛門のようなグループに、かつて村々において自らを主人公としたさまざまな滑稽譚を語っていた半職業的な咄家たちの姿を見ることができるとすれば、渡嘉敷ペーケーの場合はいわばプロの咄家ということにもなるのだろう。彼は「王様」お気に入りの家来であり、話し相手、遊び相手にもなるものであるから、むしろ「御伽衆」のような存在なのである。秀吉の御伽衆であつたと言われる曾呂利新左衛門などにも近いわけであるが。

そこで、実際のところ、渡嘉敷ペーケーとはいったいだれだったのだろうか。本土の頓智話の場合にもしばしば、それらの主人公たちがかつて実際に生きていたと伝承され、その墓なるものが残っていたり（彦一、吉右衛門、高知中村の泰作、広島の越原左衛門）、子孫と言われる人々が存在したり（吉右衛門）して、聞き手にそれらが実在の人物であることを信じさせる環境のなかで語られる。それらのうちには、たしかに実在の「咄の者」を核として成長していった場合があつたかもしれない。渡嘉敷ペーケーもまた、琉球の歴史上に実在した人物だと言われている。しかも、その実在性は、なにごとと事実と歴史に帰せしめようとする沖縄の風土のせいなのか、本土の頓智者たちの場合にくらべていっそう強いうように思われるのである。たとえば、真栄城兼良（まえばらけんりょう）氏編『北谷村誌』という書物に渡嘉敷ペーケーの伝記風の記事を載せているので、まずそれを参照してみよう。年紀の点に矛盾があるものだが、要約して示せばつぎのようなものである。

ペーケーは尚敬王の三十一年、寛保三年（一七五〇）、首里赤田村の渡嘉敷兼倫の三男として生れた。童名は思亀、和名は兼副、

唐名は葉緝烈であつた。父の兼倫は尚穆王の右筆、主取を勤め、謡取調役として江戸上りをするなどの功績があつた。兼副は花などの職を勤めたが、二十七歳のとき玉川王子が鹿兒島に上るのに随行した。そして、かの地で、七年のあいだ和文、和歌、書道、生花、謡、剣道、茶道など諸道の修行にはげむ機会にめぐまれた。帰国の際には尚穆王の世子・尚哲の仮右筆となり、つづいて和右筆となつた。多芸多才な諧謔家であつたので王や王子に寵愛され、詩歌を所望されて奉り褒賞を賜わつたこともしばしばであると家譜にも記録されていた。船手の役職を辞して北谷間切桑江之前に隠遁したのちにも、尚瀨王をはじめとする貴人の訪問があつた。尚育王十四年、天保十二年（一八四一）、九十一歳のとき北谷間切真栄城の「名島」を与えられ、渡嘉敷の姓を真栄城に改めた。同王の十七年、弘化一年（一八四四）、九十五歳で世を去つた。（要約）

この記事によれば、渡嘉敷ペーケーは晩年にその姓を「真栄城」に変えたということであり、彼の父も彼自身も「兼」の字を名乗頭（和名の頭）に持っていたとあるわけであるが、実は、この書の編者・真栄城兼良氏もまた、ペーケーの子孫だと言われている。したがって、この記事のようなどころが、ペーケーの子孫（と言われる人々）の伝承や「家譜」によつて伝わる渡嘉敷ペーケーの人物像だったようである。沖縄では、歴史上の有名人物や知られた伝説の登場人物がある家の祖先の話として語られるということがごく一般的なこととしてあるのだ。いまの場合にもほかに、「渡嘉敷兼……」あるいは「真栄城兼……」という姓と名乗頭字の組み合わせをもつた方の語る渡嘉敷ペーケーの話が、たまたま民話集に記録されている例がある。たとえば、ペーケーの子孫だと自ら言つ、ある語り手　渡嘉敷兼求さんという方、明治十三年（一八八〇）年生によれば、ペーケーは「わたしの子孫に馬鹿なことをするのは出な

いはずだ」という「遺言」を残したという。調べてみたところ、實際監獄などに入れられて罰を受けた人はその子孫にはいなかった。とこの語り手は誇らしげにおっしゃっている。明治十三年生まれのこの方はペーケーを直接知っているという人からさまざまな話を聞かされていたのかもしれない。また、隠棲の地、北谷では、ペーケーの書の掛け軸がいくつかの家に残されていたが、さきの戦争のために失われたとのことである。これらの書と讃、また、ほかに伝わっている狂歌、琉歌もあつたと言われている(前出『北谷村誌』)。ペーケーと格別に縁のない語り手たちのなかにも、こうした「歴史上に実在した偉人・風流人」としてのペーケーの像を聞き手に描いてみせる人たちがいる。それらを聞くとき、沖繩の人々が共通にもつイメージとして、王府に奉仕するまじめな役人でありつつ、風流と諸芸に生きた渡嘉敷ペーケーの人柄がうかがいあがる。しかし、そこに彼の多面的性格のすべてがうかがえるとは言えないようである。それを知るにはやはり、ひきつづき伝承(笑話)の世界の彼の活躍ぶりを見なければならぬのだ。

二

二二二で、豊見城村(現在は市であるが、以下調査当時の名称による)真玉橋まだんはしの金城千代さん(大正三年生)の語られた「蝉捕り」と「吸い物の蓋」を聞いてみたい。大勢のお年寄りがあつまる集団調査の場で、二話つづけて語ってくださったものである。

あのね、渡嘉敷ペーケーとかしちとって、ジンプナー(=知恵者)がね、頭がきれて、知恵がある……。それと王様に、首里のこつちに使われているわけよ、王様に。ある日ね、王様がね、「でいーペーケー、でいー、山に行つてね、遊んで来よう」と言つてね、(ペーケーを)

連れていくわけよ。あんさくとう(=それで)、ペーケーもいつしょと行ったからね、王様んかい(=王様に)、「わん(=わたし)ねーアササー、アササーになるからね。アササーわかるねー、蝉、蝉の大きいの。なるからね、うんじょう(=あなた)、下でこのアササー捕るようにしてね、ヤンムチさ。ヤンムチわかる？ 糰もち、うんこれが、捕るねーびしみそーりー(=捕るまねをしてください)」「んち言つたつて、このペーケーが。王様が下で、ペーケーは木に登つて。ひつつかつて。だから、あんさくとうね、この、ささ、取つて、(王様がペーケーに)「これ(=ヤンムチ)ひつつけるときにね、このまたペーケーはね、小便しょうべんしたつて。あんし(=それで)、(王様が)「(聞き取り不明)なんでわたしに小便するねー」と言つたらね、「このアササーはね、飛ぶときにはね、さささ、飛ぶときには小便しょうべんくわーするさーに(=小便をするからね)」「言つたつて、このペーケーが。だから、王様も道理があたつていからね、罰ばつもしなかつたつて。あれは、飛ぶときは小便しょうべんくわーするつて、蝉は。うん。だから、さささ、(ヤンムチを)刺さそうとしたからね、飛ぶねーびして小便しょうべんくわーしたつて。小便王様しょうべんにしてもね、これはもう罰はなかつたつて。道理があたつていから。

つづいて、おなじ語り手の、かりに「吸い物の蓋」と名づけてある話を聞いてみよう。

このまた渡嘉敷ペーケーとかしちはね、あれさ、お祝い事に呼ばれたつて。呼ばれたからね、こつちご馳走ちしう出すでしょ。「ご馳走出すからね、ジンプン(=知恵、工夫)して出すからね、」どつぞ上がつてくらすい「と、言うわけさーね。あんし、(渡嘉敷ペーケーは)「ん、なま(=いま)家やから食べてきてもう腹いっぱいだから、もうあとで上がるから」「んち、話に夢中なつてね、あんしまたこれはね、「食べる

きにはね、蓋をあげないで上がってください」って言われるわけよ。うん。あんさくとうね、「はいはい」んち、「わかりました」んち、もう話しえーに夢中なつてね、「いま腹いっぱいだから」んち、あんし、あとで、(聞き取り不明)これ冷えた時分にね、「これやんさい、もう冷えているからね、蓋はあげないでかえてください」んさい、もう冷えて、このペークーが。打たれたつて、また。あつちはね、い言つたつて、このペークーが。言われているでしょ。こつちは「蓋あけないで、上がってください」言われているでしょ。こつちはまた、「もう冷えているからね、熱いのと取りかえてください。蓋はあげないでそのままかえてください」んさい言われたつて。これ、いっページンブナー(=大変な知恵者)だったつてよ、渡嘉敷ペークーは。

渡嘉敷ペークーの話として、金城千代さんは以上の「蟬捕り」と「吸い物の蓋」を語ってくださいました。いずれも、渡嘉敷ペークー話としては類例がないか、すくないものである。ここで、よく聞かれる渡嘉敷ペークー話を通覧しておく、たとえばまず、「王様のお辞儀」と名づけられている話がある。ペークーは王様を家に招待した。ところが、入り口が低く造つてあつたので、王様は頭を下げ、お辞儀をして入つてゆくはめになつた。などと語られる。また、「王様と暮」という話はペークーが王様と暮をうつとき、対等の友達のような口をきくので側役人に叱られた。つぎに王様と暮盤をはさんだとき、ペークーがひどくかしくまつた態度をとるので王様はおもしろくない。わけを知つた王様は側役人を叱りつけ、ふたりはもとのようにして暮をうつた。などという。また、「褒美の片荷」という話もある。ペークーは王様から褒美として米俵をひとつもらつた。それを自分の瘦せ馬の片側につけたところ馬はひっくり返つてしまつた。反対側につけると今度はそちらにひっくり返る。これを見た王様がもう一俵くれたので、ペークーはそれらを馬の両

側につけ、つりあいを取つて運んでいった。こうしてペークーは二俵の米俵を手に入れた。などという。また、「味噌と花木」は王様がペークーに味噌をくれた。味噌をもらつて運んで行くなんてはずかしくないか、と言われたペークーは王様の大事な花木を取つて味噌に差し、花木をもらつて帰るようにつて味噌を持つて帰つた。などという話である。あるいはまた、「馬競走」。ペークーは馬競走の場に雌馬を牽いてきた。ほかの雄馬がみなその雌馬の尻を追いかけたのでペークーが勝つた。などという。

こうしてみるとやはり、「王様」とのやりとりをめぐる話柄が多いのであるが、辻や仲島遊郭のジュリ(遊女)とのあいだのできごと、ペークーと世間の人々との交際にかかわる話もある。たとえば、こんな話である。

辻のジュリアンマー(=抱え親)が家造つた。床の掛け軸がまだだつたので、ペークーが来たときに「書いてください」と頼んだ。ペークーは「その家はあんたひとりの力で造つたのかね。他人からお金を借りて造つたのかね」と尋ねた。アンマーが「わたしが自分でもうけたお金で、他人からは一銭も借りずに造りました」と言つたので、ペークーは「それでは書いてやろう」と言つて、あとになつて「蜘蛛の巣」と書いて持つてきた。アンマーは字が読めないのでもそのままにしていたが、字を読める客が笑つて「蜘蛛の巣と書いてある」と言つた。そこで、ペークーがやつてきたときにアンマーが文句を言つと、ペークーは「蜘蛛は他人の手は借りずに自分の巣を作る。それとおなじだ」と答えた。アンマーはなるほどと納得した。(要約)

これとおなじ話型で非常に卑猥な意味の書を書いてやつたという話もあるが、ここではとてもふれられない。また、ジュリに金をだまし取られ、

あとになってこれをとり返す駆け引きの話など、金銭とジユリをめぐる話^④もしばしば聞く。風流の人、渡嘉敷ペークーの一面を存分にあらわすこつした話がまだまだある。

また、ペークーが北谷に隠棲してからの話である。

ペークーが首里の役人をやめて北谷の勢頭原^{シトウザウ}に隠居したとき、桑江の前の宮城ウトウンナという人と友だちになった。ある冬の寒い日に火鉢をまえにしていると、宮城がやって来た。宮城がその火鉢を欲しいというので、ペークーは条件として「わたしがあなたのうちに行くときに酒とこちそうを出してくれないか」と言った。「たやすいことだ」「それならいいよ。持って行け」ということで、宮城は喜んで火鉢をかついで帰った。ペークーは夜が明けるのを待ちかねて、明けるとすぐに宮城の家に行った。そして、酒、肴を腹いっぱいこちそうになって帰った。(ところがその後、)ペークーは翌日もその翌日も毎日来る。一箇月半たつて、「わたしの財産みんなこの火鉢に食われてしまふ」と、宮城は火鉢をかついでペークーの家に行き、「もつ火鉢いらないからひき取ってくれ」と言った。ペークーは、「この火鉢はどんな人にくれてもいつももどつて来る火鉢だ。あなたがいらぬんだつたらひき取りましよう」と笑った。(要約)

おなじ話は各地で聞くことができ、火鉢でなく急須、薬罐ということもあり、やられる相手が「坊主御主^{ボウズミ}」ということになっている場合もある。「坊主御主」とは第十七代琉球国王・尚灝^{ウシロク}(一七八七—一八三四)の呼び名である。奇行が多かつたというこの人物は史実のみならず伝承の世界で知られ、沖縄の伝承説話の代表的な主人公のひとりになっている。在位二十四年(一八二七)に渡嘉敷ペークーの住む北谷に近い浦添^{ウラソエ}の城間に隠遁したというが、この「坊主御主」と渡嘉敷ペークーとをめぐむ話が多々伝えられており、この「帰ってくる火鉢」型の話もそのひと

つである。おそらく、さまざまな話型を核としてふたりの有名人物がなにかと結びつけられてゆくというぐあいに、伝承説話の増殖が見られるわけである。

三

ほかの伝承説話にもしばしば言えることであるが、渡嘉敷ペークーの話は芝居、「沖縄芝居^{ウチナシバ}」に組まれて豊かに発達したということがあるようである。語り手自身が芝居で見たという話もあり、また、いかにも芝居の場面を彷彿とさせる話もある。たとえば、

ペークーはとても酒の好きな人だつた。番所の初集まりのとき、同僚のひとりが「正月のマーサ酒があるので飲みに来い」と言った。そして、お膳、酒を用意して、ペークーが来るころに家の人はみんな「隠れる、隠れる」と隠れて、節穴からペークーがどうするか見ている。「ちゃーびらさい(=ごめんください)」とやってきたペークーは飲みたくてたまらず、「ペークー来たか。とー上がれ」「それじゃあ、おじゃまします」「マーサ酒あるよ」「それではこちそうになります」「……と自問自答をして、飲んだり食べたりしはじめた。家の人もみんなアハアハと笑つて出て来た。(要約)

各地で聞くことのできる、この愉快な話も芝居の一場面であればいい。そうおもしるからう。これがもともと芝居にかけられていた題材と考えれば納得もゆくのであり、実際この「ひとり問答」の話を芝居で見たと言つ語り手もいる。また、語り手が、芝居で使われていたペークーの「口説^{クチトク}」を教えてくださいださる場合もある。

船手^{フナテ}もーきぬ銭金^{ゼンカネ} 酒^{サケ}とう色^{いろ}とうに飲み使^{チカ}てい 残^{のこ}る小銭^{コゼン}うち捨^していてい マワシー一本^{一本}ひき回^{まわ}ーち 船手空手^{フナテカラテ}ぬ北谷^{キタヤ}かい(=船手の

役職でもうけた金も、酒と色恋とに使いはたし、残った小銭を投げ捨てて、禪一本の無一文で、「船手・空手」の北谷へ行く^④。

このせりふを吐いてペークーはジュリに小銭を投げ与え、北谷に隠遁した^⑤というのである。こうしたペークーの口説はほかにもいくつか聞く。

もうひとつだけ、これもわりあいよく聞く話である。

南郷力丸という人が「新しき刀求めこれあり候。お望みの方は勝負いたす」と書いた立て札を立てた。これを見た渡嘉敷ペークーは「新しきとつくり求めこれあり候。お望みの方は勝負いたす」と立て札を立てた。これを薩摩の藩主の家来が見て、藩主のまえで勝負をさせた。

勝負の日にペークーは「沖縄では死ぬときに筵のうえで死ぬ習慣があるから、筵を敷いてそのうえで戦いましょう」と言った。戦いがはじまると同時に、ペークーは筵を引いて南郷力丸を転ばせ、持っていたとつくりでたたいてあばら骨を折った。(要約)

おそらく「南郷力丸」なる人物は薩摩の侍と思われる。おなじ話がほかの語り手によって多く語られているが、渡嘉敷ペークーが「薩摩の人」「日本の武士」と勝負したなどと語られているからである。この人物をペークーが機転によってうち負かす痛快な話は、やはり芝居のなかの場面だったのではないだろうか。とかく、行為・動作の説明や視覚的表現が多い語りになっている。ほかの芝居由来の伝承説話でもしばしばあることだが、語り手たちが、かつて見た芝居の場面をことばによって再現するかのごとく語っているものと推測されるのである。この話を聞くときに、著者はおなじく沖縄芝居の「モーイ親方」^⑥で、モーイ親方役の役者が「薩摩の殿様」をやりこめて観客の拍手喝采を受ける場面を思いおこす。口頭伝承の「薩摩の難題」にあたる場面がもちろん芝居にもあるわけである。一六〇九年の「慶長の役」後、薩摩藩によって二百数十年をこえる不当な支配を受けた琉球・沖縄の人々は、伝承や芝居の世界に

おいて薩摩あるいはヤマトンチ^⑦を打倒・報復し、精神の安定をはかることがしばしばあった^⑧ようである。渡嘉敷ペークーもその役割の一端をになわされているのである。

かくして伝承から芝居のなかにとりこまれ、さらにそれが伝承のなかに流れ出すという循環のなかで、渡嘉敷ペークーの像は単純なる偉人あるいは御伽衆を脱却し、多彩な人物像として成長していったのである。各地の民話集、昔話集におさめられたペークーの笑話は、こうしたペークー像のさまざまな位相を見せてくれるものなのである。

以上、「渡嘉敷ペークー話 沖縄・豊見城の笑話」と題する本稿は、豊見城市の民間説話資料のうち、「笑話」としての性格をもつ話についての考察である。「沖縄・豊見城の昔話」、「沖縄・豊見城の伝説」という副題をもつ続稿を用意したいと考えている。

注

- ① 「真切」は琉球王府時代の行政単位であって、おおそ現在の市町村に当たる。当時の「村」は「真切」のなかの各集落であり、現在「字」名を以て呼ばれるところの家々の単位であった。
- ② 福田晃氏指導の立命館大学・説話文学研究会による。当時大学院生であった著者もこの調査に参加している。
- ③ 拙稿「沖縄・豊見城の昔話」(『奄美沖縄民間文芸研究』第一八号、一九九五年一月)、「沖縄・豊見城村の『瓦屋節由来』」(『立命館文学』五五二号、一九九八年一月)、「沖縄豊見城村のキジムナー話」(『人文研究』第九五輯、一九九八年三月)、「沖縄・豊見城村の伝説『真玉橋の人柱』」(『人文研究』第九七輯、一九九九年三月)、「宜保チマシー 沖縄・豊見城の世間話いくつか」(『人文研究』第一〇六輯、二〇〇三年九月)、「ガーナムイ 沖縄・豊見城の伝説いくつか」(『人文研究』第一

- 〇七輯、二〇〇四年三月)。
- ④ この仕事は、シリーズ『琉球の伝承・文化を歩く』(三弥井書店)の一卷として公刊される予定である。このシリーズは、専門家のみならず、琉球・沖縄、また民俗・民間説話に関心をもつ一般読者をも対象として編まれるものである。
- ⑤ 福田晃「総説・民間説話」(福田晃編『民間説話 日本の伝承世界』、世界思想社、一九八九年)。
- ⑥ 本来の方言の発音で「とうかしち」、標準語の発音で「とかしき」、標準語の影響を受けた方言の発音で「とうかしき」「とかしち」など。現在実際にはこれらの発音が入り乱れている。なお、近年沖縄では純粋・本来の方言が相当に廃れ、とくにより若い世代のあいだでは、方言と標準語との中間的な位置にある新しい方言、「沖縄大和口」(ウチナーヤマトグチ)が話されている。
- ⑦ 方言の発音で「うやかた」、標準語の発音で「おやかた」。
- ⑧ 方言の発音で「かつちん」、標準語の発音で「かつれん」。
- ⑨ 倉田隆延「南島の笑話モイ親方をめぐって」(『相模国文』一一号、一九八四年)参照。
- ⑩ 柳田国男『日本昔話名彙』(日本放送出版協会、一九七七年(初版一九四八年))。関敬吾『日本昔話大成』では第九巻「笑話」「三 巧智譚」「B 和尚と小僧」の「五二三 親棄山」に類型の話が集成されている。柳田の「完形昔話」がおおよそ関の「本格昔話」に当たる。
- ⑪ 柳田国男『日本昔話名彙』「完形昔話」「智慧のはたらき」「和尚と小僧」。
- ⑫ 『日本昔話大成』第一〇巻「笑話」にも「狡猾者譚」の部をもつていている。
- ⑬ 『日本昔話大成』「笑話」でも「狡猾者譚」の大分類のもと、「狡猾者」と「おどけ者」の小分類を行っている。
- ⑭ 柳田国男『笑の本願』「吉右会記事」、大島建彦『咄の伝承』(岩崎美術社、一九八五年(初版一九七〇年))「おどけ禅享の逸事」。
- ⑮ 柳田国男『笑の本願』「吉右会記事」、大島建彦『咄の伝承』「昔話研究の動向」(注⑭参照)。

- ⑯ 「第八編 伝記伝説名所旧跡」「五、渡嘉敷ペークー」(北谷村役所、一九六一年)。
- ⑰ 尚敬王在位第三十一年の寛保三年は一七五〇年ではなく、一七四三年である。
- ⑱ 尚育王は在位第十三年に逝去している。天保十二年(一八四一)は尚育王在位第七年に当たる。
- ⑲ 尚育王十七年という年は存在しない。弘化元年(一八四四)は尚育王十年。
- ⑳ 北谷町教育委員会・社会教育課・北谷町史編集事務局の亀田氏を通じ、「ご子息の真栄城兼徳氏からいくつかの情報を得ることができた。それによれば、ペークーの位牌は本家が持っていて、墓は北谷町宇地原区にある。また、同町美浜の、現在兼徳氏が住まわれている屋敷(のあるところ?)はかつてペークーが隠居した場所である 等々。いずれ現地を訪問し調査を行いたいと考えている。
- ㉑ 『喜名の民話』一〇四頁。これに先だつ語りは、渡嘉敷ペークーは、扇子ひとつを持って筵のうえで内地の武士と剣術の試合をしたが、筵を引いて武士を転ばせ勝った(この話型については後述)。ペークーの親は国王の子守役だった。ペークーは八歳のときから国王に氣に入られ酒を飲んだりしたので、国頭の叔父のところによられた云々。また、「上地・親志・都屋の民話」(一〇三―一〇四頁)には真栄城兼久さんという方による「渡嘉敷ペークー」の語りがおさめられている。なお、本稿では市町村発行の民話集に掲載される語りの本文および標準語訳を引用する際一部に手を加えている場合がある。
- ㉒ 「渡嘉敷ペークー、彼は首里の赤田村に生まれた。尚敬王時代に、公儀勤めをしておられた渡嘉敷ペーチン、兼倫の三男として生まれた。渡嘉敷ペークーは、本名を渡嘉敷兼福といわれている」(『長浜の民話』一四八頁)。「渡嘉敷ペークーはね、九五歳まで生きてるよ。それで尚穆王時代の御用室でもあるしね、また鹿児島へ行つて勉強をして、茶道とか武道とかもやっている」(『北中城の民話』五五一頁)。「渡嘉敷ペークーは、一三代の尚敬から一四代の尚穆の時代だからね……武道も茶道もまた書も名人だから」(同五五三頁)。前稿で、沖縄において世間話は伝説・史

譚と接していると述べた(「宜保チマシー」、注③参照)が、かの南島では笑話もまた伝説・史譚と連続している観がある。なお、すべての語り手が話の登場人物について前述のような「歴史」的知識をもっているわけではない。すぐあとに登場する金城千代さんも、渡嘉敷ペークーのことを「豊見城村の人はすよ」と言っておられる。豊見城村(市)に渡嘉敷という集落があるためにおこる誤解かと思われる。

②③ 一九九〇年八月九日(木)、藤井佐美、組原洋子両氏採録(於真玉橋公民館)。著者翻字。

②④ 一九九〇年八月九日(木)、藤井佐美、組原洋子両氏採録(於真玉橋公民館)。著者翻字。

②⑤ 「蟬捕り」については類話が一例(梗概のみ)報告されている(「西原町史」別巻・西原の民話・二九九頁)。

②⑥ 「沖縄独自話型」とされる(「仲里村史」第四巻・四八一頁)。

②⑦ 「沖縄の独自話型」とされる(「仲里村史」第四巻・四八一頁)。

②⑧ 「日本昔話大成」第一〇巻「笑話」「四 狡猾者譚」「A おどけ者の五五七「褒美の片荷」には鹿兒島県、熊本県の採集例が挙げられている。こうした南九州の伝承からの影響は想定し得る。

②⑨ 伊芸弘子編『沖縄百里の昔話』小橋川共寛翁のチティバナシ(三弥井書店、一九九二年)一六三頁。

③⑩ 『名護の民話』二〇四頁、『羽地の民話』一九九頁。

③⑪ 『瀬名波の民話』一一六頁。ほかに、『屋部の民話』二三四頁、

『久志の民話』一四二頁、『宜野座村の民話』昔話編・三四六頁、『いしかわの民話』一一六頁、『伊良皆の民話』一六四頁、『長浜の民話』一五五頁、『波平の民話』七〇頁、『上地・親志・都屋の民話』一一四頁、『北中城の民話』五六六頁、『浦添市史』第三巻・六四頁、『那覇の民話資料』第一集・八二頁、『仲里村史』第四巻・四七八頁。

③⑫ ペークーがいったん承諾してからこの交換条件を言い出すまでのふたりのやりとりについて、語り手は「渡嘉敷ペークーが考えを違えたらたいへんだからと(宮城が)すぐこの火鉢を持って帰ろうとしたら、ペークーはその火鉢を抱きついて、離さないわけさ」と言っている。このあたりは、のちに述べるような、芝居の場面をことばによって再現するか

のような語りの例である。

③⑬ 『屋部の民話』二二九頁。

③⑭ 『羽地の民話』二〇五頁、『いしかわの民話』一九七頁、二〇〇頁、『渡慶次の民話』一〇九頁、『北中城の民話』五六四頁、『沖縄百里の昔話』一六〇頁。

③⑮ 『いしかわの民話』一九七頁。『北中城の民話』では坊主御主からもらったヤックワン(薬罐)が小道具になっている。いずれも注③④参照。

③⑯ これまた伝承の世界で有名なウエーキ(豪農)の城間ナカと坊主御主との交流も語られている(別稿にて取りあげる予定)。

③⑰ 『北中城の民話』五六二頁、『沖縄・糸満市の昔話』二二四頁ほか。

③⑱ 多くの沖縄芝居の題材は口頭伝承からとられ、また、伝承説話の世界へと逆流してきた。拙稿「沖縄・豊見城村の『瓦屋節由来』」、『沖縄・豊見城村の伝説「真玉橋の人柱」(ともに注③参照)でもこのことを取りあげている。

③⑲ 琉球王府時代、冊封使歓待の宴のため、踊奉行の玉城朝薫が始めたという「組踊」がその母胎となった。組踊をになった土族の人々が、明治維新・廃藩置県後に秩禄を失い、民間へ出てこれらを伝えたため、新たな素材をも取り入れて大衆的な演劇へと展開していったもの。全編「沖縄口」(沖縄方言)で演ぜられることが沖縄芝居の生命であると言えるのである。

④⑩ 「これは、あんたあのうよく芝居にも出ますよ、ね。芝居にも出ますよあれは、渡嘉敷ペークーのことは。わったー(「わたしたち)あれから見たよ」(『長浜の民話』一五四頁)、「これ芝居見たから」(『こちんどの民話』昔話編・三六五頁)。渡嘉敷ペークーの「按司口」(組踊の按司のせりふの話しかた)を伝える語り手もいる。「出会ーちやる者や、ヤックワンぬ按司」(卑猥な表現なので標準語訳は示さない)、『いしかわの民話』昔話編・二一九頁)。池宮正治氏の調査によれば、明治四十三年の「方言セリフ劇」の演題に「琉球故事 渡嘉敷親雲上」なるものがあり、上演期間は八月二十日から二十六日、劇団は「沖縄座」だったという(『沖縄県史』第六巻、第四部「第三章 演劇」二〇七頁)。著者はいまのところ

舞台、ビデオのいずれの「渡嘉敷ペークー」にしても観る機会にめぐまれている。

- ④1 『名護の民話』二〇五頁。』
- ④2 『羽地の民話』二〇〇頁、『恩納村の民話』二二四頁、『いしかわの民話』昔話編・二二四頁、『儀間の民話』一六九頁、『西原町史』別巻・二九七頁（坊主御主）、『那覇の民話資料』第五集・五一頁、『こちんだの民話』昔話編・三六四頁。』
- ④3 『こちんだの民話』昔話編・三六五頁。』
- ④4 『久志の民話』一四四頁。』
- ④5 『上地・親志・都屋の民話』一一四頁、『北中城の民話』五六六頁、『浦添市史』第三巻・六四頁、『那覇の民話資料』第一集・八三頁はおなじ場面を語るものと思われる。注③参照。』
- ④6 この語り手は、「この渡嘉敷ペークーの口説が、あるさ。『さていむ憂ちいせぬあさましや……』（『さても憂き世のあさましや……』）と語りはじめ、そのうち、本文に引用したような、北谷に隠遁するときの口説を紹介している（『久志の民話』一四三頁）。また、べつの語り手によれば、六十一歳で故郷に帰るときに、「鳩小ぬカマーにうち惚りてい……」（鳩のカマーにうち惚れて……）というものがあつたという（『伊良皆の民話』一六五頁）。
- ④7 『屋部の民話』二二七頁。』
- ④8 『久志の民話』一三九頁、『恩納村の民話』昔話編・二二七頁、『喜名の民話』九六頁、『瀬名波の民話』一三三頁、『上地・親志・都屋の民話』一一一頁、『北中城の民話』五六〇頁、『浦添市史』第三巻・五九頁。』
- ④9 著者はいままでのところ舞台上で沖縄芝居「モーイ親方」を観る機会にめぐまれず、ビデオに収録されたものを観ている（高安六郎演出「琉球史劇 モーイ親方」、沖縄テレビ放送製作）。
- ⑤0 「大和人」。日本人または本土の人。
- ⑤1 薩摩に連れてゆかれたが、その支配に屈しなかつた琉球の名馬、あるいはその主人の話（別稿にて取りあげる予定）もあり同様の役割を果たしていると思われる。この話型に渡嘉敷ペークーが取りこまれるという

現象もある（『久志の民話』一三七頁、注④の話の前半部分）。

注に引用した市町村発行の民話集・昔話集の一覧

- 名護市史編さん室編『名護の民話』（名護市教育委員会、一九八九年）
- 名護市史編さん室編『屋部の民話』（名護市教育委員会、一九九〇年）
- 名護市史編さん室編『久志の民話』（名護市教育委員会、一九九一年）
- 名護市史編さん室編『羽地の民話』（名護市教育委員会、一九九三年）
- 遠藤庄治監修・金城康長・照屋寛信・辺土名朝三編『恩納村の民話』（恩納村教育委員会、一九八二年）
- 遠藤庄治監修・宜野座村教育委員会編『宜野座村の民話』昔話編（宜野座村教育委員会、一九八五年）
- 遠藤庄治監修・長浜昭美編『いしかわの民話』（石川市教育委員会、一九八四年）
- 読谷村教育委員会・歴史民俗資料館編『伊良皆の民話』（読谷村教育委員会・歴史民俗資料館、一九七九年）
- 読谷村教育委員会・歴史民俗資料館編『喜名の民話』（読谷村教育委員会・歴史民俗資料館、一九八〇年）
- 読谷村教育委員会・歴史民俗資料館編『長浜の民話』（読谷村教育委員会・歴史民俗資料館、一九八一年）
- 読谷村教育委員会・歴史民俗資料館編『瀬名波の民話』（読谷村教育委員会・歴史民俗資料館、一九八二年）
- 読谷村教育委員会・歴史民俗資料館編『波慶次の民話』（読谷村教育委員会・歴史民俗資料館、一九八五年）
- 読谷村教育委員会・歴史民俗資料館編『波平の民話』（読谷村教育委員会・歴史民俗資料館、一九八九年）
- 読谷村教育委員会・歴史民俗資料館編『上地・親志・都屋の民話』（読谷村教育委員会・歴史民俗資料館、一九九四年）
- 遠藤庄治編『北中城の民話』（北中城村教育委員会、一九九三年）
- 浦添市史編集委員会・浦添市史第三巻（浦添市教育委員会、一九八二年）
- 西原町史編集委員会・遠藤庄治編『西原町史』別巻（西原の民話）（西原町役場、一九九一年）

那覇民話の会編『那覇の民話資料』第二集（那覇市教育委員会、一九八〇年）

遠藤庄治監修・下田博美・平良尚子編『こちんだの民話』昔話編（東風平町教育委員会、一九八四年）

立命館大学説話文学研究会編『沖縄・糸満市の昔話』（糸満市教育委員会、一九九六年）

遠藤庄治編『仲里村史』第四卷（仲里村役場、一九九五年）

追記

本稿は、平成八年度、平成九年度、十年度、科学研究費補助金（奨励研究A）、および、平成十三年度・小樽商科大学学長裁量経費（プロジェクト研究）の援助による成果の一部である。

（小樽商科大学助教授）